平成 24 年度卒業論文題目・要旨

大阪におけるため池の維持管理に関する研究
―ため池オアシス構想を例に―

杉本 順也

大阪府のため池オアシス構想をとりあげ､農業用水確保としての役割を縮小･終了したため池の新しい維持管理について考察することで､課題や今後の展望を明らかにすることが本研究の目的である。研究の結果､ため池の維持管理には周辺住民の参加の必要が明らかになり､オアシス構想は周辺住民参加型の維持管理体制を生み出した点で評価できるが、改善するべき課題はまだまだ多い。

Ｂ級ご当地グルメを取り巻く環境
―大阪府高槻市を事例として―

黒田 浩朗

近年「Ｂ級ご当地グルメ」が注目を集めており、富士宮市では 9年間で439億円の経済波及効果等があったとされている 。本稿では、大阪府高槻市での事例を取り上げ、「高槻うどんギョーザ」の今後の展望について議論することを目的とする。「高槻うどんギョーザ」の場合には、解決すべき課題点も残されているが、高槻市の立地条件・中心市街地の賑わい・普及活動に対する姿勢といった、他とは異なる条件を有しており､こうした条件を生かした地域活性化への取り組みが必要となる。

町並み保存地区における着地型観光の可能性
―徳島県美馬市脇町を事例にして―

早田 有杏沙

地域活性化の手段として、住民主体のまちづくりは近年盛んに行われている。本論文では、町並み保存地区として発展してきた徳島県脇町における着地型観光の可能性について検討していく。脇町観光ボランティアガイドの活動は、様々な視点から地域のまちづくりにおいて影響を与え、観光基盤としての重要な存在となっている。

創造地区形成への取り組み ―沖縄クリエイターズビレッジ事業を事例として―

吉川 絢

近年、中心市街地の衰退が問題になっている。そんな中、アートによるまちづくりが目立つようになってきた。本論文では、沖縄クリエイターズビレッジ事業を事例として、創造地区形成の初期段階について考察した。事業では、アーティスト誘致のために空き店舗をアトリエに改装する補助や、イベントの企画が行われている。開始から5年がたった今、事業対象地区は創造地区形成の萌芽段階にあると言える。しかし最初期にあるのも事実なので、今後の動向に注目していかなければならない。

主要産業の動向に見る工業地域周辺部の変容
―大阪府貝塚市西葛城地区を事例として―

五十嵐 大輝

大阪府貝塚市西葛城地区は、戦前から繊維産業が盛んであった同市の内陸部に位置している。地区においてもその工業化が進んだが、日本の繊維産業が衰退すると共に、地区の工業にも変化が見られた。本稿の目的は、こうした背景をもつ地区の工業についての一考察を行うことである。地区の工業化は、地区の人口構造にまで変化をもたらした。今日の地区における工業は下請けとして操業するところが多いが、各事業所は創意工夫をもって、これを続けている。

台風接近時の雨量分布特性と台風経路の関係
―近畿地方南部を事例として―

堀之内 龍一

本研究の目的は、近畿地方南部において、台風接近時の近畿地方南部の雨量分布特性と台風経路の関係を明らかにすることである。1983～2004年までの台風の経路・雨量データをもとに、主成分分析・クラスター分析・コンポジット解析を用いて、その関係について定量的に評価した。その結果、近畿地方南部より南・南東、近畿地方南部より北・北西を通過した台風の経路分類毎に各雨量分布の特徴を捉えることができた。また近畿地方南部では年降水量の分布傾向と台風接近時の雨量分布特性が類似していることが判明した。

平成 24 年度修士論文題目・要旨

緑茶消費変化に対する産地の受容と対応―三重県・伊勢茶を事例として―

丸市 将平

近年の農業をめぐる環境は様々に変化している。農業地理学研究を概観してみると近年ではより一層理論化・体系化が叫ばれており、特に「フードシステム論」に代表されるような従来の「産地」を扱うモノグラフからの脱却を目指す研究が志向されている。しかしながら、農業地理研究は隣接する農業経済のように農業の全容を把握するには至っておらず、特に消費と生産の相関関係を明らかにする研究は多くない。

本研究では農業地理学が多くの貢献をしてきたにも関わらず、高度経済成長以降の消費変化や流通機構の編成によって次第に研究対象から外されていった緑茶に焦点を当て、消費と生産の相関関係を明らかにすることを目的としている。

高度経済成長以降、二度の大きな消費変化を経験した緑茶であるが、統計をもとに消費変化を精査し、緑茶の商品特性に見る流通機構を既往研究にて明らかにしたのち、事例研究の対象地である三重県の各産地の生産者、問屋、市場、行政などの聞き取りによって産地の受容と対応を明らかにした。